［長崎県病院企業団通信］

ふくよか

2017秋号
■長崎県病院企業団本部
■平成29年10月発行

目次 CONTENTS

p2 …… 企業長より
「秋の気配」

p3 …… 郷診郷創について
上五島病院のアンケート結果をご紹介！

p4 …… 特集① 病院企業団議会議員研修
今年は本部（長崎市）で開催しました

p5 ……ワークショップ2017 in 対馬
地域医療の未来を担う若者が集結！

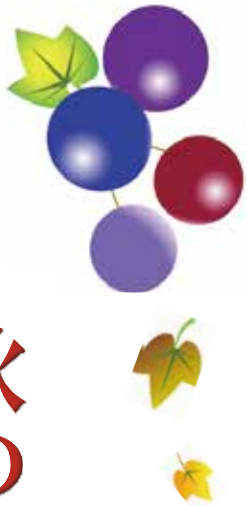
p5 ……本部職員のつぶやき① NEW!
「マンネリ化を見直したい！」

p6 ……特集② 第39回長崎県地域医療研究会
“伝統”の地域医療研究会の模様をお届けします

p7 ……地域から
対馬病院から、かわいい動物と新病院のご紹介

p8 ……Break Time
［本部の引越し］

vol. 13



秋の気配

企業長　米倉　正大

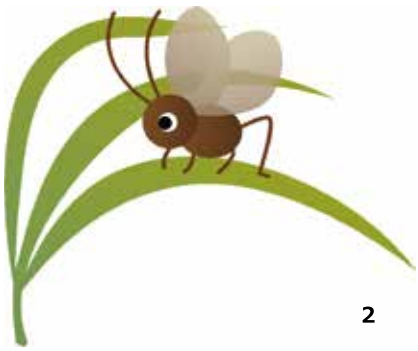
私は夕食後30～40分程度の散歩を日課にしています。いつも歩く道は川沿いに作ってある散歩コースで、夏を過ぎると道に沿って広がる草むらから多くの鈴虫の声が聞こえ、歩きながら風流な時間を楽しんでいます。花鳥風月を愛した人たちは、細くした竹を編み込んだかごに鈴虫やコオロギを入れて風情を楽しんでいたそうですが、今の日本ではほとんど聞かず、遠い昔のことになりました。

ところで、虫の鳴き声を風流と感じるのは日本人に限られており、西洋人には単なる雑音としか感じないそうです。中国人も韓国人も西洋人と同じで日本人特有だそうです。日本人の特技として、秋の虫の鳴き声を左の脳で聞き入れ、虫の話す言葉として聞いているそうで、日本人は虫の話した言葉を忖度（そんたく）して理解しようと努力しているために風流と感じるのであろうということです。一方、西洋人は右の脳で、単純に音として捉えるため、雑音としか感じないようだと、ものの本には書いてあります。先ほど日本人特有と書きましたが、日本語を母国語とする人であれば、西洋人であろうと中国人であろうと、虫の声を雑音としてではなく、しっかりと虫の声として聞き入れるというのです。逆に日本人でも外国語を母国語として育った人は、虫の鳴き声は雑音としてしか聞こえないというのです。

先日、フランス語を母国語とするアフリカのＪＩＣＡの研修生20名ほどに講義する機会がありました。1時間の私の講演に対し、質問時間を許したら質問攻めにあい、なんとさらに1時間費やしました。それではと私から彼らに一つ質問をしました。日本人の多くが、秋の虫の鳴き声を風流に感じるが、あなたたちはどうですかと彼らに直接聞いてみました。研修生といっても、医療行政の仕事をしている中年の方ばかりで、もちろんフランス語の通訳を通してであります。風流というのは訳が難しいようでしたが、研修生はまじめに答えてくれました。この虫が鳴くと帰ろうとか夏が来たとか時間とか季節の目印にはするが、しみじみと物思いにふけるようなことはないという返事でありました。やはり彼らも右の脳で聞き取っているようで、虫の声ではなく、音として捉えているようでありました。

話は少し逸れますが、国によっては、動物の鳴き声の聞こえ方もそれぞれであります。ニワトリの鳴き声は、日本ではコケコッコーですが、米国ではクックドウドルドウーというそうです。日本人としては、どうしてもその鳴き声には納得がいきません。ちなみに、フランス人にはコックエリコと聞こえるそうです。言葉が違うと同じ鳴き声でもこんなに違って聞こえるのは、脳のはたらきの不思議であろうと思われます。

一般的な本には、左の耳で捉えた音は、その信号が交叉して右の聴覚領域に達し、当然、右の耳で捉えた音は、左の脳に到達すると書いてあります。右の脳は音楽脳とも言われ、音



楽や騒音・雑音を聞き分けます。一方、左の脳は言語脳と言われ、理論的な会話などを理解する脳であると書かれています。しかし、神経学を勉強しているものとしては、これはあまりにも単純すぎると思います。人によってその発達度合いは違いますが、左の耳から入った音が交叉せずに同側の左脳に達する神経回路もあります。逆もしかりです。左でも右でも音が捉えられれば、その音は両方の脳で分析されているのが、正解だろうと思います。

働き方が問題になっている昨今、病院の職員も患者さんの救急に追われ、心にゆとりが持てなくなっているのではないでしょうか。心に余裕を持つと、日本語を母国語にしている人にとっては、秋の虫の声は風流にさせてくれるそうです。時には皆さんもそんな気分になられてはいかがでしょうか。

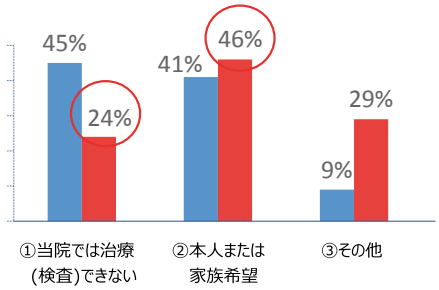
郷診郷創（きょうしんきょうそう）

今回は
上五島病院 のアンケート結果による
現状分析・課題について紹介します

病院実施アンケート ・・・ 平成２９年２～３月実施　紹介状交付者へ依頼
配布数３６、回収２２、回収率６１％

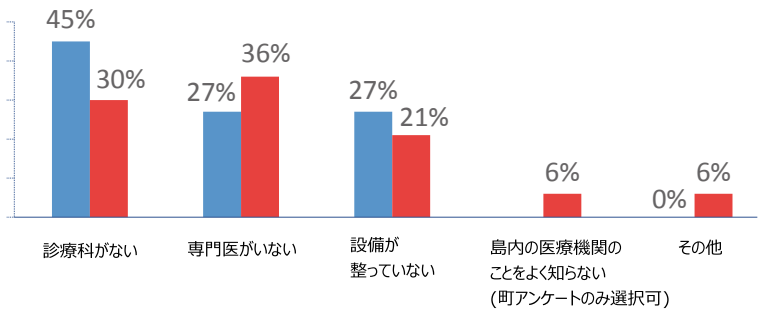
町実施アンケート ・・・ 平成２９年５～６月実施　無作為抽出で依頼
配布数１８５、回収７９、回収率４３％

Q 島外医療機関を受診する理由は？

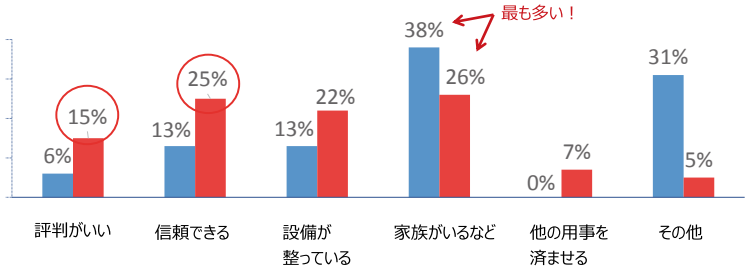


▲病院アンケートでは①と②はほぼ同数ですが、
町アンケートでは①と②が約２倍の差となっています。

Q 島外受診理由「①当院では治療（検査）できない」の理由は？（複数回答可）



Q 島外受診理由「②本人または家族希望」「③その他」の理由は？（複数回答可）



▲理由で最も多いのは「家族がいるなど」となりました。
また、町アンケートでは「評判がいい」「信頼できる」の割合が高くなっています。

今後に向けて・・・

病院実施アンケートでは、「家族がいるなどの理由で紹介状を受けて島外受診」、町実施アンケートでは「評判などの理由で直接島外受診」という傾向が強いといえます。

家族が町内に残ることができるような対策は、町全体の課題ですが、「評判・信頼」を高めるには、まずは患者接遇・環境改善を中心に取り組みを拡大、強化していく必要があります。

次号も引き続き、各病院の取り組み等をご紹介します。

Zoom up!
特集①

病院企業団議会 議員研修

8月29日、長崎西彼農協ビル（長崎市）において、議員研修が開催されました。

議員研修とは、企業団議員を対象にした研修で、これまでは企業団病院の現地視察を中心に行われてきました。
今回は、病院企業団が直面している2つの課題をテーマに、講習方式で実施しました。

テーマ① 医療人材確保対策について

これまでの人材確保対策と今後に向けた取組みについて、長崎県の太田医療人材対策室長と、企業団本部の白川総務部長からそれぞれ説明がありました。

～主な医師確保対策～

長崎県医学修学資金貸与制度（昭和45年～）

目　的：医学部生に修学資金を貸与し、離島の公立医療機関等に勤務する医師を養成
貸 与 額：6年間総額 約934万円
入学金・授業料・生活費〈月7万円以内〉・図書費〈年20万円以内〉
勤務義務年数：最大9年（貸与期間の1.5倍）、うち半分以上は離島部
貸与利率：年14.5%
◆ 一般枠　全国の医学部学生が対象　新規貸与2人（H29）
◆ 地域枠（H23入学～）
長崎大学（10）・佐賀大学（1）・川崎医科大学（6）　新規貸与17人（H29）

＜新規貸与者実績＞　（人）

	H23	H24	H25	H26	H27	H28
一般枠	3	1	2	1	3	2
地域枠	5	6	5	6	11	13
合計	8	7	7	7	14	15

↑ 太田医療人材対策室長による説明

↓ 白川総務部長による説明

現在検討中の取組

1　本土、外国から離島への医療従事者（医師、看護師、薬剤師）の呼び込み策
①「アイランドファーマシスト」
②外国人看護助手

2　医師等の負担軽減
・診療看護師が地域包括ケア病棟を担当

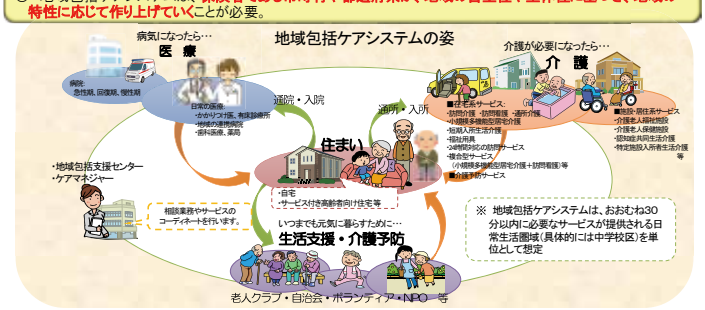
テーマ② 地域包括ケアシステムについて

長崎県の小村長寿社会課長から、地域包括ケアシステムの概要や本県における現状と課題の説明がありました。

小村長寿社会課長▸

地域包括ケアシステムの構築について

○ 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、**医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制（地域包括ケアシステム）の構築を実現**。
○ 今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要。
○ 人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、**高齢化の進展状況には大きな地域差**。
○ 地域包括ケアシステムは、**保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていく**ことが必要。



おわりに

議員研修では、議会とは違った勉強会の場として、活発な質疑が行われました。
今後は、議員の皆さまとの共通認識のもと、課題解決に向けた取組みにつなげていく必要があります。

ワークショップ２０１７in対馬

2017年8月17日(木)から19日(土)の3日間、対馬市内にて長崎県医学修学生夏季研修(ワークショップ)が開催されました。

本研修は、離島の保健医療への認識を深め、意欲を高揚させることを目的に、昭和53年から開催され、今年で第40回目を迎えました。対象は、県医学修学資金貸与制度及び自治医科大学派遣制度により養成されている医学修学生です。

今回は、医学修学生をはじめ、長崎医療センターや、病院企業団医師、看護師等、対馬市の保健師、保健医療担当者等総勢９９名が参加しました。「国境離島で考える将来の地域医療」をテーマに、病院・診療所、介護福祉施設の見学等で地理的環境を体験し、地域住民との座談会では、地域はどのような医療を求めているのか、現場でのニーズなど、活発なディスカッションが行われました。

今後も、医学修学生の皆さんが地域医療に関する理解を深め、将来の離島医師としてのモチベーションを高めていただくことを期待しています。

NEW！

本部職員のつぶやき①

本部職員が日常のあれこれをつぶやくコーナーです。

「マンネリ化を見直したい！」

総務人事班
課 長 補 佐　庄崎　鉄也

私事で恐縮ですが、10数年前からダイエット目的で週末にジョギングを続けています。始めて5,6年は体重も順調に減ってタイムも伸びて良かったのですが、ここ数年は年齢の影響か、低迷・下降気味です。基礎代謝も下がって、以前と同じような練習(もともと大した練習量ではありません。)をしていても痩せにくい体質になりました。マンネリ化した練習方法を何らか見直そうと、最近は走る前後にストレッチを少しずつ増やしています。

また、仕事では、9月に中級マネジメント研修を受講し、自分自身が成長しないと全体のマネジメントはできないと改めて認識させられました。私たち病院企業団の職場をとりまく環境も日々変化し、新しい課題、業務量も増加している中、今までの仕事の取り組み方では立ち行かなくなってきている感じがします。まずは手元の業務でマンネリ化、悪い習慣になっているところを見直しながら、周りと協力して仕事のスピードアップやコスト改善、職場が生き生きと気分よく働きやすい環境につなげていきたいです。

Zoom up!
特集②

第39回　長崎県地域医療研究会

1日目

午前中　設営風景

今年も伝統の「地域医療研究会」が、9月30日～10月1日にかけて、長崎ブリックホール（長崎市）で開催されました。

今回は、**「地域が求めている病院の在り方を探ろう」**をテーマに、企業団病院関係者　約270名が参集し、演題・講演・シンポジウムなど充実した内容となりました。

▲徳永会長　開会挨拶
（島原病院長）

▲米倉企業長　基調講演

業務改善 最優秀表彰▶
島原病院 病理診断科・検査科

特別講演

日本血液製剤機構の谷澤参事をお迎えし、「平成30年度診療報酬改定の動向」についてご講演いただきました。

地域包括ケア病棟評価やDPC制度など、有意義かつユーモア満載のトークに、会場中が聴き入った1時間でした。

シンポジウム①

「病院、院内、各部門と地域施設との交流の実情」をテーマに、DMAT活動の経験、地域連携パス運用の成果、感染対策活動の院内強化及び地域連携の必要性、小児時間外受診の対策と効果、多施設・多職種協同による口腔ケア活動の取り組みについて発表がありました。

2日目

▲フロアからも活発に
質問が出ていました▶

▲総合司会　松本看護師長
（島原病院）

シンポジウム②

「診療看護師の役割について」と題し、診療看護師の活動報告や今後の展望、コンピテンシーに関する発表があり、診療看護師についての認識を深めることができました。

また、認定看護師の立場から「特定行為看護師」としての今後の可能性についての発表や、管理者の立場から診療看護師の多様な能力について、今後の診療看護師制度への期待など、貴重な発表を聞くことができました。

▲次回会長　閉会挨拶
（壱岐病院 向原院長）

◆研究会の発表集は、企業団ホームページに掲載されます。
◆次回は平成30年10月13日・14日開催予定です。

{シリーズ}

地域から Vol.7

対馬市（対馬病院）

地域の見どころや病院での取り組みなどについて
紹介していただくコーナーです

今話題！
ニホンカワウソ？
ユーラシアカワウソ？

写真提供：環境省対馬野生生物保護センター

ツシマヤマネコ【国指定天然記念物】

▶対馬市について

『古事記（西暦712年）』の建国神話には、最初に生まれた島々（「大八洲」）の1つとして「津島」と記されています。『日本書紀（西暦720年）』の国産（くにう）み神話のなかには「対馬洲」「対馬島」の表記で登場していますし、古くから**ユーラシア大陸と日本列島の懸け橋として**文化的・経済的な役割を担ってきました。

対馬市は、一島一市の自治体であるため陸で隣接する自治体はなく、長崎県に属しますが、人的交流や経済的な結びつきは福岡県よりといえます。

人口は、1960年の69,556人をピークとして本土地域を上回る勢いで急速に減少が進行しており、現在は、31,529人（2017年7月末）。逆に近年は、高速フェリーの導入や韓国人への短期ビザ免除等で韓国釜山港経由の観光客が急増し、年間約30万人を超える勢いです。

▶対馬病院について

当院は、旧2病院（中対馬病院と対馬いづはら病院）が合併、2015年（平成27年）5月に現在地へ新築移転し、2年が経過しました。

対馬における最終(中核)病院(275床)として、地域のかかりつけ医の役割から、2.5次医療までの広範囲な医療を担っています。その関係上、最新の医療を提供するため、ＭＲＩ、ＣＴ等検査機器をはじめ放射線治療装置の整備を行っています。

通院の利便性にも患者さんの要望を取り入れ、昨年、**「病院敷地内のバス停及び屋根付歩道」**を整備しました。これまでは天候が悪い雨の日などバス停内に雨が降り込み、また、正面玄関まで距離があるため、利用される方にご不便をお掛けしていました。今後も患者さんなど病院を利用される方が、不便を感じないように配慮いたします。

私たち対馬病院職員は、病院理念のとおり、「対馬の人々が、泣きながら生まれ、健やかに育ち、朗らかに働き、穏やかに老いて、安らかに人生を終えること」ができるよう地域に根差した支援を続けてまいります。

Break Time

「　本　部　の　引　越　し　」

魚市場跡に建設中の新県庁舎も外観が明らかになり、いよいよ完成間近になりました。年明けには県庁が移転し、市内のにぎわい～人の流れ～も随分と変わっていくことだろうと思います。

ところで、この新県庁舎に我らが病院企業団本部は入らないことになっています。本部の移転先は、かつての離島医療圏組合が入居していた長崎県大波止ビル（夢彩都隣）の７階です。長崎港を一望できる見晴らしのいいところで、いささか不謹慎ですが、大型客船や夏の花火大会が今から楽しみです。

年明けの引越しに向けて、いよいよ作業を本格化させていくことになります。新しい世の中の動きに的確に対応できるよう、書類（仕事）の整理と併せて、気持ちを奮い立たせていかねばと思います。

平成21年４月に設立された病院企業団は、平成30年４月に10年目に入ります。企業団を取り巻く課題は、人口減少・医療人材不足・患者減など様々です。これまでの９年間の出来事に思いをはせながら、新たな知恵を絞って対応していかなければいけないという責任の重さを改めて感じているところです。

まずは、「郷診郷創」を着実に進めるところから、みんなで一緒に頑張っていきましょう。

（文：副企業長　安永 留隆）

編集後記

Break Timeでも話題になりましたとおり、平成30年1月には本部の引越しがあります。そして本紙次号も１月発行予定。無事発行できるよう編集員一同がんばります！

記事についてのご意見・ご感想をいただけますと、励みになります。どんなことでも結構ですので、下のメールアドレスまでお寄せください。

（ふくよか編集担当）

ふくよか

表紙のはなし
日本血液製剤機構　谷澤参事
第39回長崎県地域医療研究会（H29.9.30～10.1）においてご講演いただきました。「しまで魚を食べたい！」と仰っていました。

平成29年10月発行
編集・発行／長崎県病院企業団本部
〒850-0033　長崎市万才町4-12　日本生命ビル旧館6階
TEL.095-825-2255　FAX.095-828-4759
E-mail：honbu@nagasaki-hosp-agency.or.jp
URL：http://www.nagasaki-hosp-agency.or.jp/

NAGASAKI HOSPITAL AGENCY
長崎県病院企業団　検索